

大坂留守居役と館入

— 天保飢饉前後の秋田藩と大坂 —

金 森 正 也

はじめに

藩政の運営にとって大坂が占める役割の重要性については、あらためて指摘するまでもあるまい。幕藩体制の流通および金融における大坂のはたした役割については、早くから多くの研究蓄積が積みあげられているところであるが、近年においても全国的視野に立つて、金融論や市場論などから大坂の機能を検討した研究がなされ、深められている状況にある。それと同時に、個別の藩と大坂との関係についての論文もまた豊富な蓄積をもつに至っている。たとえば、加賀藩や仙台藩、また会津藩、越後新発田藩、越前鯖江藩、萩藩、松代藩、岡山藩などについての研究があげられる。多くの場合大名金融論からの論究であるが、後二者が大坂留守居役の動

向や役割について検討の対象としているのが注目される。とりわけ泉正人による岡山藩の研究は、大坂留守居役の役割を金融・財政的な側面にとどめず、多様な政治的役割に注目したところに特徴がある。巨視的な視点から大坂商人と大名財政との関連を考えることの重要性については指摘するまでもないが、藩の大坂留守居役の動向の詳細な分析をとおして、そのはたした意義を明らかにすることは、従来のだ名金融論についても寄与するところが少なくないと思われる。

秋田藩と大坂商人との関係についてもすでに先学の研究蓄積があるが、どちらかというと大局的な見地からの財政状況への言及にとどまっており、個別の商人との交渉過程などについてはふれられていない。そのような研究状況をふまえて、この小論では、大坂留守居役の日記をとおして、天保四

年の凶作・飢饉前後の調達銀をめぐる交渉過程を検討することで、そのはたした役割を明らかにし、またどのようにして秋田藩が飢饉状況を乗り切ったのかを明らかにしたい。

本稿で分析の対象とするのは、『介川東馬日記』と通称される史料である。介川東馬は、文化十三年（一八一六）に家督継承時の禄高が六六石余で、佐竹義和の人材登用策のなかから頭角を現した典型的な改革派官僚である。介川は、文化十三年～十四年、文政九年（一八二六）～十年、文政十二年、天保三年（一八三二）～六年、天保九年の五度大坂詰を経験している。なかでも天保の大凶作時にはその後足掛け四年間にわたって在坂しており、その間における上方商人との折衝を詳細に日記に書き残している。当時の役職は勘定奉行であり、介川のほか、勘定奉行としては富田治兵衛（途中清水衛門に交代）、同吟味役山崎甚五兵衛・小野崎又右衛門が詰めていた。本来、在坂の時期全般を対象としたいが、紙数の都合で、藩政がもっとも危機的状況に直面した天保飢饉前後の時期に限定してその活動の内容とはたした役割を明らかにしてみたい。なお、『介川東馬日記』の引用については、特に脚注を付さず、史料引用部分には「日記」とし年月日を付すことにする。

第一節 「介川東馬日記」にみえる上方館入

最初に、『日記』に出てくる上方館入を概観し、藩との関係を推測しておく。『日記』には、しばしば秋田藩の館入に対して「賞与」「賞言」をあたえる記事が出てくるので、そこから館入を務めた商人が判明する。

まず、この時期の蔵元は、山中（鴻池）新十郎と梶川（塩屋）孫左衛門の二名である。山中は、豪商として著名な鴻池善右衛門の有力な別家筋にあたる。本稿ではこの両家については「山中」と「梶川」で表記を統一したい。

次に、館入である。館入は、さらに「旧家」「新家」「浜方」に区分されて登場する。「旧家」は、宝暦期に銅問屋として藩の蔵元を務めていた長浜屋源左衛門をはじめとした三名で、この段階では、藩との経済的なつながりはそれほど強いものではない。これに対して「新家」は、数も多く、藩がその経済的援助という点において多くを期待した商人たちである。長田（加嶋屋）作兵衛をはじめとした一〇名が主な「新家」である。金銭面での援助という点においては、蔵元よりも重要な役割をはたしている新家館入が存在する。彼らが「新家」と称されるのは、おそらく一九世紀以降に藩との関係が成立したことを反映しているためであり、「旧家」が格上であるということではない。後述するように、藩の経済的支え

表1 長田家の諸藩からの給米銀高

給米名目	給米銀高	割合(%)
肥後知行米	78貫806匁	42.5
筑前御扶持	14貫884匁	8
宇和島御合力米	1貫587匁	0.8
広島御合力米	16貫 25匁	8.6
丸亀御合力米	8貫241匁	4.4
伊東御扶持	1貫574匁	0.8
水戸御扶持	3貫897匁	2.1
新地肥後御扶持	2貫412匁	1.3
丸岡御知行	1貫775匁	0.9
篠山御扶持	2貫846匁	1.5
仙台年暮米	4貫 50匁	2.9
雲州御扶持	2貫325匁	1.3
秋田御知行	40貫275匁	21.7
明石御知行	3貫201匁	1.7
作州被下米	2貫526匁	1.4
備後御扶持	992匁	0.5

・「摂津国大坂玉水町加嶋屋長田家文書」
(国文学研究資料館所蔵)解題より作成。

という意味では「新家」のほうが圧倒的に重要な役割をはたしている。なかでも、長田作兵衛は、前掲の蔵元両名とともに秋田藩財政において重要な位置を占めている。表1は、安政三年（一八五六）における同家の諸藩からの給米を当時の銀相場に直して整理したものである。これによれば、熊本藩について秋田藩の知行米が二位となっており、全体の中の比重が大きいことがわかる。

第三に「浜方」と称される館入らがいる。これは、堂島を拠点とする新興商人たちを意味するが、おそらく大きくは「新家」館入に分類されるべき商人である。ただ、堂島商人であるという点において、廻米の処理や米価の動向の情報など、

藩にとつては重要な機能を担う存在であった。これに分類されるのは、室谷（播磨屋）仁兵衛など八名である。以上のほか、堺・近江・京都などにも館入が存在した。

以上のように、館入と称される商人が、想像以上に多数におよぶことにまず驚かされる。筆者も、館入を蔵元商人とほぼ同義としてとらえ、廻米や廻銅を通じて交渉のあった上方商人という程度の理解の仕方であったが、この点をまず改める必要がある。もちろん、これら多数の館入と藩のつながりがすべて等質のものであるわけではなく、その関係の具体的内容も不明なものが多し。しかし、後述のように、天保初期において藩の銀米調達依頼に協力し（その度合いは異なるが）、なんらかの形で応じた者たちであることは間違いない。

なお、「大阪の研究」は、館入（立入）について、「特定の職務をもつものではないが、諸藩が大阪において金策をなす場合、当該藩の蔵元・掛屋の相談相手となつて、いろいろと斡旋の労をとつた」といい、「また常設的な蔵屋敷の職員でなくとも、銀主として何等かの形で藩の金策に参画するときには広い意味において、当該藩の用達であり、立入であった」と説明している¹⁵。「新修大阪市史」は、館入を「蔵屋敷に出入りして普請・婚姻・国替・飢饉等の際の臨時御用に応じた」¹⁶者と説明しているが、同時に「立入は、蔵屋敷に出入りを許され、随時蔵屋敷側の借銀依頼に応ずる蔵元・掛屋以下、大

名賃をする町人の総称である」¹⁷とも述べている。前者の説明では、「金策に参劃するときは」という限定つきのように述べているが、館入町人はその役割を務める大名家から知行や扶持米を下賜されており、その関係は固定化したものである。また、時の経済力によつては蔵元などよりも藩にとつて頼りになる存在であつたことは、以下で論述していくつもりである。藩にとつての経済的役割という意味では、蔵元や掛屋を含む広い概念でとらえた『新修大阪市史』の説明が妥当であるように思う。

以上のことを確認したうえで、さらに指摘しておきたいことは、冒頭の蔵元、山中（鴻池）新十郎および梶川（塩屋）惣十郎と、新家館入の長田（加嶋屋）作兵衛の三名については、藩側がこれを「三家」と称して、特別に親交を継続していることである。次の史料をみよう。

江戸八月割之内此表仕出ニ向鴻池・塩屋・かしまや江調達相頼候義、一昨年ハ千貳百貫目頼候へとも江戸より減之義申越九百貫目ニ相減、昨年も九百貫目頼候所、今年ハ御米下落且閏月等も有之二付増候而頼候外有之ましく候所、例年八月中頼入候へとも拙者上着之上申合候而と申事ニいたし置候よし、段々申合候所、御国作方不宜、

（中略） 連も千貳百貫目都合相頼候外無之ニ付、当六日山崎屋寿之助基会ニ而参り候節拙者・武兵衛立会表座し

きニ而同人江申談、（中略）然ル処三家申合之上昨日内々右之御受申上候事ニ相成候段寿之助昨日申聞候よし吟味役申候
（「日記」天保三年十月十四日）

冒頭に見える鴻池・塩屋・かしまやは、それぞれ中山・梶川・長田の三家である。この史料から、この三家が、江戸表の財政の大本を賄っていることがわかる。さらに右の史料の続きによれば、天保三年五月から同四年四月までの江戸御月割金の総額は金四万一千五百一十兩で、そのうち三万二千六百兩が「大坂仕出」とされている。つまり、江戸表の財政の約七割強をこの三家が担っているのである。

第二節 天保三年の銀調達と借財仕法の継続

1 天保三年の新規調達

周知のように、天保四年（一八三三）は大飢饉の年であるが、その前年も秋田表は不作であつた。介川が十月初旬に受取つた秋田表からの九月十二日付の書状によれば、早稲はまだしも中稲・晩稲は実入りがいい状態で、「別而沢入山添等絶作、当捨之処も間々有之」であり、領内平均して「六分内外」の出来と想定される「不容易違作」と報告されている。そして、当面解決すべき問題を、

差当此違作ニ而ハ明年大坂御廻米等之御都合如何可有之哉、殊ニ明年御借財仕法引継御頼ニも候得共右等へ相響

不申二いたし候ても新規之御調達等如何可有御座哉

〔日記〕天保三年十月三日

と指摘している。すなわち、この段階での大坂詰方の課題は、①明年の大坂廻米の問題、②「借財仕法」切替えの問題、③秋田表の違作に対応するための新規調達の実現、の三点に集約される。②については後述する。これらの問題について、介川はまず、加嶋屋弥十郎を呼んで事細かに相談している。加嶋屋弥十郎は、長田家の支配人であり、しばしば介川の相談にのり、また助言をあたえた人物である。このとき弥十郎は、次のように述べている。

此節三家之ものへ御申可被成との思召至極御尤ニ支配人とも被召呼被仰候而可然奉存候、尚御回米之義ハ一円被相止御国弘ニ被成置候而可宜、左様被遊候連三家之もの何とも申上候事は有之ましく候、御国元御益ニ相成事ニ御座候得ハ其義第一之御事ニ奉存之段申事二候、(中略)差当三家其外辰巳屋・鴻池・千草や・播仁此七人ニ而式百貫目ツ、と見候、千四百貫目ハ出来候わけニ御座候、其余ハ何とか被成かたも可有之、作兵衛義ハ可成丈出精相勤候心得ニ御座候段申事ニ御座候、清八ハ嘸六ヶ敷事を可申上なと申聞笑ひ候事二候

〔日記〕天保三年十二月十四日

これによれば、館入らは、秋田表の実情を理解しているの

で、翌年の廻米は不要であること、館入ら七人で一四〇〇貫目は調達可能であることが回答されている。この七名は、三家のほか、辰巳屋久左衛門・鴻池庄三郎・千草屋忠三郎・室谷(播磨屋)仁兵衛である。いずれも新家(浜方を含む)とされる館入である。最後の一文は、山中の支配人である鴻池清八あたりはいろいろな文句も言うことだろう、という軽口である。この段階では、館入側にも余裕が感じられる。

介川らは、この加嶋屋弥十郎の報告に基づいて、翌日館入らへ申し渡す演説書を作成しているが、「明年之都合大抵取調候所凡千四百貫目余之不足ニ相見」という銀高に示されるように、ほぼ右の加嶋屋弥十郎の助言に沿ったものであった。

翌一六日、介川は三家の支配人を召喚し、この演説書を申し渡している。この後場所を移しての酒席となるが、「酒中内々弥十郎拙者江申候ハ、途中二而両家江も咄合候所いづれも請よろしく御座候、子細無之候」と述べていることは、加嶋屋弥十郎が根回しをした結果であることを示している。またこの席で、中山家の支配人鴻池清八は、「明春之事ハ無摠義ニ御座候、是迄あなた様・小の崎様ハいつも御難決成所江計り御当御迷惑成御事ニ御座候、しかしあなた様ニ無之候而不相成ニ付自然其所へ御向之義ニ可有御座」〔日記〕天保三年十二月十六日と語ったと記している。史料中「小の崎様」

とあるのは、勘定方吟味役小野崎又右衛門である。この部分は、多分に介川の自己賛辞の側面もあるかもしれない。しかし、介川が館入らと浅からぬ関係を築く努力をしていたことは察せられる。

ところが翌年になって早々、国元から不足分の明細が届き、その総額は三五〇〇貫目ほどと伝えてきた。幕府からの銅山拝借米や領内調達の実現性がないこと、江戸月割金の増大や、家中借知の割合を半知することによって生じる不足分（それまでは六四の借知であった）などがその理由としてあげられている。ここにおいて介川らは、当初一四〇〇貫目としていた調達目標額を急遽増額する必要に迫られた。介川はただちに館入らへの調達依頼分の割直しを行い、二月下旬の段階ではその目標額を達成させている。その明細は次のとおりである。

山中新十郎（六〇〇貫目）、梶川孫左衛門（六〇〇貫目）、長田作兵衛（六〇〇貫目）、辰巳屋久左衛門（五〇〇貫目）、千草屋忠三郎（五〇〇貫目）、鴻池庄兵衛（四〇〇貫目）、室谷仁兵衛（四〇〇貫目）、近江屋休兵衛（五〇貫目）、加嶋屋三郎兵衛（四〇貫目）、山下八郎右衛門（二〇貫目）、奥田仁左衛門（三〇貫目）、伊勢谷藤四郎（三〇貫目）、升屋源左衛門（二五貫目）、難波屋太助（二〇貫目）、久々知屋吉兵衛（五〇貫目）、酢屋利兵衛（五〇貫目）、鍵屋五兵衛（五〇貫目）、

百足屋伊右衛門（三〇貫目）、以上である。¹⁸ このほか、記事の内容から何らかの協力はしたがその金額が判明しない者もある。なおそのすべてが一括して納入されたわけではなく、同年九月までの分割とされたものがほとんどであった。また、利息は一部の反発を押し切った形で月七朱（〇・七％）とする介川の家で決定した。この一件について介川は、辰巳屋支配人長兵衛が、「畢竟御実意之よく通候故之御事と奉感入候」と感想を述べ、また山中家支配人の鴻池清八が、「此度之義初拝承仕候節御大造之事二付何とも恐入且当惑計り仕居候、中々二ヶ月や三ヶ月二かた付候義二無之候処実二半月二不満中々速二相済、全以あなた様之御精神いつれへも腹へ入候事二相見、奉恐入候」と述べたことを記している（『日記』天保四年二月十五日）。介川の得意満面の気持ちに手が取るようにわかる一文である。

このように、天保三年の不作による財政難への対応は、ひとまず介川ら大坂詰役人の努力で成果を上げたが、館入らの好意的対応も、ここまでは限界であった。その後、「借財仕法」の処理に続き、未曾有の大凶作が東北を直撃し、そのことによる大坂米市場の動向により、介川らは国元への飯米の確保に奔走することになる。

2 借財仕法の継続

介川たちの次なる課題は、「御借財仕法」とよばれるものの継続を、館入らに納得させることであった。この仕法は、文政十二年（一八二九）に藩の都合により執行したもので、一部借銀の元銀返済を据え置き、利息を下げて返済するというもので、五年間の約定であった。一例として、表2に「三家」の場合を示そう。いわゆる「御月割銀」と最下段の「臨時調達」以外は、元銀据置となっていることがわかる。利率も低く、これは一朱下げられた数値である。また前々からの分は元利とも五年間「御断」とされている。これは、三家のみならず借財のあったすべての館入に適用された。

従来、藩がいわゆる大名貸しを受ける際には、一括返済をなすケースはなく、長田家から借り受けた文化七年（一八一〇）の場合、表3のように返済予定の明細を整えている。このケースでは返済期間は二〇ヶ年と比較的長く、また利息も三朱と例外的に低いが、それでも債権者は毎年定額の返済を受け取り、最終的にはおよそ二〇四貫目余の利益を獲得することになる。文政十二年の借財仕法は、これを大きく変更するものだったのである。

天保四年はその最後の年にあたっていたが、藩にはもとの規定に戻して返済する経済的余裕はなく、介川は仕法のさらなる継続を館入らに依頼しなければならぬ立場におかれて

表2 御借財仕法案（三分家）

山中(鴻池)新十郎	梶川(塩屋)孫左衛門	長田(加嶋屋)作兵衛	内 容
636貫目	384貫目	487貫200目余	前々より置居分、当丑より来已迄5ヶ年中元利御断
	70貫目		同上分、当丑より来已迄5ヶ年中元銀置居、利息3朱
322貫700目余	320貫700目	217貫200目余	去去年御處事御用返済残分、当丑より来已迄5ヶ年中元銀置居、利息4朱
398貫目	278貫目	304貫目	去亥年御調達分、当丑より来已迄5ヶ年中元銀置居、利息4朱
212貫500目	212貫500目	175貫目	去子年御手伝御用御調達分、定の通当丑より5ヶ年割元利返済
85貫目	75貫目	90貫目	去子年2、3月御月割出銀分、定の通元利返済
365貫目	345貫目	290貫目	去子年9月より御月割銀分、定の通元利返済
		100貫目	子年11月中御調達分、元銀置居、利息5朱
100貫目			公儀融通銀、当丑より来已迄5ヶ年中元銀置居、利息5朱
90貫目	90貫目	74貫目	去12月難臨時御調達分、定の通元利返済
(計)2209貫200目余	(計)1775貫200目	1737貫400目余	総計 5721貫800目余

・「介川東馬日記」文政12年1月24日条より。計・総計は試算。

表3 久保田藩借入金返済仕法書

	元 銀	利息支払分	元銀返済分
文化7年 返済	496貫700目		
文化8年	496貫700目	17貫881匁	17貫881匁
文化9年	478貫818匁	17貫237匁	18貫524匁
文化10年	460貫293匁	16貫570目	19貫891匁
文化11年	441貫102匁	15貫879匁	19貫882匁
文化12年	421貫219匁	15貫163匁	20貫598匁
文化13年	400貫620目	14貫422匁	21貫340目
文化14年	379貫280目	13貫654匁	22貫108匁
文政1年	357貫172匁	12貫858匁	22貫904匁
文政2年	334貫268匁	12貫 33匁	23貫728匁
文政3年	310貫539匁	11貫179匁	24貫582匁
文政4年	285貫956匁	10貫294匁	25貫467匁
文政5年	260貫488匁	9貫377匁	26貫384匁
文政6年	234貫103匁	8貫427匁	27貫334匁
文政7年	206貫769匁	7貫443匁	28貫318匁
文政8年	178貫450目	6貫424匁	29貫338匁
文政9年	149貫112匁	5貫368匁	33貫394匁
文政10年	118貫717匁	4貫273匁	31貫488匁
文政11年	87貫229匁	3貫140目	32貫622匁
文政12年	54貫607匁	1貫965匁	33貫796匁
文政13年	20貫810匁	749匁	20貫810匁

・文化7年10月より利息3朱、年々閏月を加えず12ヶ月分の定。
 ・匁(目)未満の「分・厘」は表中には表記していない。

天保四年五月、介川は、同役富田治兵衛、勘定吟味役小野崎又右衛門・山崎甚五兵衛らが列席するなか、館入らにその仕法の継続を演説書をもって通達した。まず二十三日に三家に対し、翌二十四日にこの仕法にかかわる館入らに通達している。申し渡し

の要点は次の二点である。
 一 去ル丑年仕法御借財は迄御渡利足之内、口々無残壹朱減之事

但融通銀永納銀無利足年賦は是迄之通之事

右之通二候得ハ来午より卯迄十ヶ年中御頼致度候事

又は

一 是迄仕法を以利足御渡之分ハ右御渡高下地之通居置、惣而半通元入半通利足渡之積、是迄半通宛元利渡候分ハ無残元入之事

但融通銀永納銀無利足年賦ハ同断之事

右之通二候得ハ来午年より元銀済切迄御頼致度事

〔日記〕天保四年五月二十三日)

いた。冒頭に引用した秋田表からの書面に「明年御借財仕法引継御頼ニも候」とあるのはこのことである。しかし、当然これは館入らの望むところではない。しかし、介川と懇意であつた加嶋屋弥十郎は、「仕法之義ハ明年中ハ御年限之中二候故早春より彼是申上候もの決而有之ましく、もし申上候もの御座候ハ、其義只今何とも見込付不申と被仰候得ハ夫二而相済事ニ御座候」(「日記」天保三年十二月十六日)と助言していたが、新規調達の早期の実現に気を強くした介川は、時を置かずこの仕法継続の件も決着しようとした。

つまり、①文政十二年の仕法で決定された利率をすべて一朱減すること(この場合は元の仕法どおり元銀は据置)、あ

るいは②従来どおりの利率で返済を希望する場合は、返済額の半分を利息、残り半分を元銀分とすること、これまでその方法で返済してきた者はすべての額を元銀返済とすること。

この二者択一となつてゐる。しかも、仕法の継続はさらに一〇年と延長されている。なお史料中に「融通銀」とあるのは、天明三年（一七八三）に幕府が特定の大坂商人らに御用金を命じ、出銀者がそれを拝借するかたちで、公銀として直接大名に貸し付けさせたものである。¹⁹ 梶川などからは再検討の願いが出されているが、それはほぼ形だけのものであり、おおむねすべての館人から六月上旬には了承の回答が出されている。しかし、こうした介川（藩）のやり方に批判がなかったわけではない。たとえば、堺の館入酢屋利兵衛は、今回の通達には「前年被仰聞候御辞とハ黑白之違」であるとし、

且豊凶之義はいつれ有之習ひ、御領民之御救等之費多ク候故、夫を被仰立銀方共へ利下ケ等被仰付候御義は銀方より御国之民を救ひ申理ニ当り 君人之御仁政ニは不相当哉ニ乍恐奉存候
〔日記〕天保四年七月八日

と、痛烈に批判している。「仁政」という語が研究上の抽象的概念ではなく、同時代の被支配者側に共有されているものであることがここから確認できる。この口上書は藩の急所を衝くものであっただけに、介川にとってはそのまま看過することができなかったようで、このあと介川は執拗なまでに酢

屋の「不敬」を責め、詫状を提出させている。

さて、十年後の卯年は天保十四年（一八四三）であるが、この年約定どおり返済方法は従来のあり方にもどつたのだろうか。介川はすでに職を退いているのでそのことは日記では確認できないが、長田家（加嶋屋）の文書で検討しておこう。²⁰ 実は、天保十四年、長田家では複数の未決済の証文を一紙に書き直し、それにそれらの証文を添付して整理している。そしてそれは「秋田口々調達証文」と「秋田違作凶作調達証文」の二つのグループに分けられている。後者は、前節で述べた天保三年の「違作」と次節で述べる天保四年の「凶作」対策の調達銀である。これについては後述することとして、ここでは前者のものを例としてあげておこう。

秋田口々調達証文拾壹通之写²¹

但無利足年一朱半元入之口

先年より追々仕法出、猶又天保九戌年より年壹朱半元入之株証文拾壹通在之口數ニ相成、此度一紙ニ証文ニ改ル、則拾壹通之メ高

元入錢合銀千九貫七百四拾八匁九分四厘也

此高天保十四年卯十二月証文改ル、古証文返納

但天保十三寅年迄仕法通り渡り方済

天保十四年卯年より来ル午年迄四ヶ年之間又々是迄通り年

一朱半元入渡り

表4 秋田口々調達銀元入残高調証文内訳

	年 代	借 用 高	元 入 高	残 高	利 足		宛 名
1	文化7.10	496貫700目	420貫69匁48	76貫630目52	3 朱	年来借用分	加嶋屋又兵衛・定八
2	文政9.11	120貫目	31貫883匁22	88貫116匁78	8 朱	御慶事御用	加嶋屋作兵衛
3	文政10. 6	90貫目	23貫400目	66貫600目	8 朱	臨時要用	加嶋屋作兵衛
4	文政10. 閏6	100貫目	26貫目	74貫目	8 朱	臨時要用	加嶋屋作兵衛
5	文政10. 7	90貫目	23貫400目	66貫600目	8 朱	臨時要用	加嶋屋作兵衛
6	文政10.11	120貫目	9貫目	111貫目	8 朱	御慶事御用	加嶋屋作兵衛
7	文政11. 4	100貫目	12貫547匁15	87貫452匁85	8 朱	要用	加嶋屋作兵衛
8	文政11. 4	80貫目	6貫目	74貫目	8 朱	臨時要用	加嶋屋作兵衛
9	文政11. 6	200貫目	15貫目	185貫目	8 朱	要用	加嶋屋作兵衛
10	文政11.11	100貫目	12貫151匁21	87貫848匁79	8 朱	要用	加嶋屋作兵衛
11	文政11.11	100貫目	7貫500目	92貫500目	8 朱	要用	加嶋屋作兵衛
計		1596貫700目	599貫951匁06	1009貫748匁94			

・長田家文書「秋田口々調達銀元入残高調」添付証文より作成

銀拾六貫百貳拾五匁四分五厘ツ、元入

年々十二月二受取筈

但館入中証文口数二相成甚御手数二付一紙証文二改候
様御屋敷より被仰出候事

証文拾毫通

元金合千五百九拾六貫七百目

内

五百八拾六貫九百五拾毫匁六厘 十一口元入済

引残

銀千九貫七百四拾八匁九分四厘也

壹紙証文二成ル

天保十四年卯四月しらへ

掛り

源七

安助

これに、史料中でふれている十一通の未決済の証文が添付されているのであるが、その内容を整理したものが表4である。この表と右の史料をあわせて検討すると次のことが明らかとなる。まず史料では「無利足年一朱半元入之口」とあるが、これは利息なしで元銀分を年〇・一五%の率で毎年返済していくということであろう。残銀の総計が(史料傍線部分)で、これは表中の残高総計(各証文の残高を合計したもの)と一致し、「年々十二月二受取筈」とされる額は、正確では

ないがほぼ一朱半とする規定にそつてゐる。しかし、表中の利息の項目に明らかなように、各証文にはそれが作成された時点で定められた利息が記入されていて、それまでの残高総額の一項目めを別とすればすべて八朱である。ここで史料冒頭に目を移すと、「天保九戌年より年々朱半元入之株証文拾壹通在之口数ニ相成」とあることから、天保九年に年一朱半の割合で元銀の返済のみの方法に変更されたことが知られる。そして、天保十四年の段階で未決済の証文が一紙にまとめられたのである。つまり、前記の借財仕法の継続が終了する段階以前九年の段階でさらなる変更があり、十四年以降にもそれが継続したということがわかる。

第三節 天保の凶作と調達・買米

1 交渉の過程

天保四年、国元の天候が不順で悪作が予想されることは、七月の御用状で介川にも伝わっていた。それによると「是迄一体稲育不宜、別而山本・両比内・男鹿不宜 御城下廻不宜、河部より上仙北二郡ハ先ツ相応、地廻ハよふく一両日此かた少々出穂ニ相成候よし」という状況であり、「江戸よりハ近国辺も不作之模様、不軽事ニ付早々於大坂御買米被成可然、又七郎殿も右之御決意ニ候」と、大坂での買米も視野に入れた意見も述べられていた（『日記』天保四年七月二十

九日）。それでも「河部より上仙北二郡ハ先ツ相応」というあたりに、いまだ非常事態という認識に至つてゐるとはいえない様子がうかがわれる。しかし、同日に受け取った勘定奉行金易右衛門の書簡には、「蕨根も堀尽今ハ藪立之所ニ計少々有之と申位之事（中略）去年ハ其表御調達ニ而御凌被成候へとも今年ハ術策も尽き候」（同前）とあつて、容易ならざる様子が伝えられていた。

そして、大坂に秋田凶作の第一報が届いたのは、天保四年の九月に入つてからである。ここで秋田表から、領内は「絶作同様」で「非人も多く出御救木屋被立置候」状況であること、さらには領内飯米確保のために「差金を以也拾万石も大坂ニ而御買米被成候様」との意向を伝えてきたのである（『日記』天保四年九月七日）。

介川は、この時もまず加嶋屋弥十郎、同定八に相談をもちかけている（『日記』天保四年九月十六日）。その時の様子を、介川は次のように記している。弥十郎らの意見は、まず三家に相談のうえ、その後主立ちたる館入らに相談すること、買米の件についてはふれず調達銀のこのみ相談すべきというものであり、買米については長田家の店方においても検討してみるといふにとどまった。しかし、会談後の酒席において吟味役小野崎又右衛門に語つた弥十郎の「如何様とも心配可仕候間御苦勞被遊ましく」という言葉は介川にとつて大きな

救いであつたに違いない。翌十七日、三家の支配人、鴻池幸八（山中家）、塩屋平蔵・同茂助（梶川家）、加嶋屋弥十郎・同要助（長田家）を呼び、国もとの凶作・飢饉の状況を説明している。この時は状況の説明と協力の依頼にとどめているが、その反応は「いづれも驚入深く恐怖の様子二而何分主人共二も得と申置可申之趣申聞候」というものであつた。その後の酒席において、加嶋屋弥十郎だけは「定八申合店かた江も一応相談も仕候所随分よろしきわけ二候」と述べて介川を安心させている。ここでも加嶋屋の秋田藩への協力的姿勢は一貫しているといえよう。

加嶋屋両支配人との内談は、同月二十一日にも行われている。このとき弥十郎は、米一〇万石の買入れについては「不残買まとひと申事中々行届候筋二ハ無之」とし、「いづれ二も右之代莫大之事二候得ハ私式了簡二相及兼候故、何分御蔵本両家其外辰巳・千草や・鴻庄・はり仁・私等一同二御召よろしく申合呉候様被仰候而可然奉存候」と助言している（『日記』天保四年九月二十一日）。そこで介川は、まず各家ごとに支配人へ内談のうえ三家一同で相談し、そのうち全体に依頼するという方法を主張し、弥十郎もこれを良策としていく。さらに弥十郎は、今回は利息は八朱でなければならず、また引当（担保）についての質問が出されることも想定に入れておかねばならないと指摘している。これは、天保三

年の違作対応の調達、借財仕法の継続と難題に対応させられてきた館入らにとつて、今回の新規調達は、容易に請け負いかねる問題であると想定されたからにほかならない。同月の晦日にも三家支配人との相談が行われているが、「御買下米之御用不為得已御趣意ハ主人共始実ニ御尤之御義重疊恐入奉存候、店々二而も種々申合仕候へとも何に仕候而も御大造之御事二付、一同驚入候而何とも了簡も付不申、不取敢三軒之もの寄合申合をも打重候へとも是以恐懼仕迄二而如何とも取締候相談相生兼申候」（『日記』天保四年九月晦日）というように、彼らの反応はなかなか厳しいものであつた。

そして、十月二十四日、まず三家に対し正式な通達が行われた。三家とも主人は病氣あるいは所用で欠席、支配人格の者が出席している。吟味役および雑質屋両名列席のうえ、介川東馬がまず「演説書」を読み上げ、その後三家に対して一通ずつ調達高を記した別紙が演説書を添えて渡された。演説書は、天保四年の凶作・飢饉状況が縷々述べられた長文である。目標額は一万二〇〇〇貫目で、そのうち三六〇〇貫目が秋田・江戸での調達、八四〇〇貫目が大坂惣御館入による調達となつている。返済については、買米一〇万石のうち五万石を家中の飯米や飢民の御救い米にあて、残り五万石を地払いしその代金をあてる。そのほか、毎年の銅・鉛の登せ分の代金や、銀山の出銀増分が一年間で一七〇〇貫目見込めるか

ら、これらをすべて返済にあて、五年割の返済としている。これらの条件で鴻池・梶川・長田の三家に割り付けられた調達高は一家につき一五〇〇〇貫目であった。

2 館入らの対応

このようななかで、介川は国元に対して、勘定奉行一名と家老の登坂を要請している。八月末に同役富田治兵衛が帰国し、当時勘定奉行は介川一名となっていたのである。家老の登坂については、「態ニ御登坂と相成候ハ、御館入共取請形も格段之義ニ可有御座、且夫々御賢慮も可被為有義ニ御座候得ハ御指揮ニ相従ひ幾重ニも力を謁可申」(『日記』天保四年十一月十八日)という思惑があったからである。その一方で介川らは、各館入らに対して個別に折衝を行う。ここでは、その主なものをとりあげ、館入の対応を検討してみたい。

まず注目されるのは、辰巳屋である。辰巳屋に対しては、すでに九月二十五日、すなわち三家への正式な通達以前の段階で二〇〇貫目の調達を依頼していたが、十月一日支配人の辰巳屋佐助・長兵衛が訪れ、一二〇〇貫目の調達を了解したのである。これが、秋田藩の飢饉対策としての調達依頼に館入が応えた最初であった。辰巳屋久左衛門家は、天明三年幕府が御用金を公銀として大名に貸付けた際、その一部を負担した融通御貸付組合(十一軒)の一人であり、宝暦から天

明期にかけてしばしば幕府より御用金賦課の対象とされた豪商である。藩の依頼金額には及ばないものの、大造の銀高を、「返済かた等染々伺候筋も無之、幾重ニもよろしく御含被成下、他より先立御請申上候故御返しも先ニ被成下度等之義乍笑申候」という態度で引き受けた辰巳屋に、辛苦のなかにあった介川はよほど感銘を受けたらしく、「心底実ニ感入候事ニ候」と絶賛している(『日記』天保四年十月一日)。なお、この後介川は辰巳屋に蔵元となることをもち掛けているが、これは体よく断られている。

辰巳屋と対照的な対応を示したのが蔵元の山中家である。山中家は、文政十二年段階に介川が登坂したところから逼迫の内情を訴えていたが、天保四年の凶作は秋田藩一藩に限ったことではなく、いよいよ難渋の色を濃くしていた。十月二日、御月割銀と天保三年の違作対応の調達銀については引き受けた以上なんとかしても務めるが、その他の御用は御免下されたきこと、および蔵元の御役御免を歎願してきたのである。さらに同月七日には、山中新十郎自身が介川の屋敷を訪れ、直接苦渋を訴えている。

山中家の経済的逼迫は、大名貸による不良債権の累積であった。しかし山中家は蔵元であり館入らの筆頭であったから、「外々より上席等仕罷在候而ハ御積之程も恐入、外江対候而も赤面之わけも有之」という事情もあった。これに対し

て介川は、「兼而御手内之義ハ十分承知いたし罷在、別而丑年以来之仕法ニ付いやまし御手詰りニも可相成氣之毒至極」と理解を示しながらも、蔵元役返上については、「夫ニ而向後之縁も絶候様之もの、誠に以不容易義」であり、このことを国元に申し送れば、人によつては「年来之わけも有之所、此節ニ臨追而御用勤り候迄返上と被仰立候込夫ニ而相済候ニも有之ましき筋ニ候を、些如何など、取請申ましきものニも無之」と述べて、その動きを牽制している。「実ニ無余義わけ氣之毒之至ニ御座候へとも、新十郎右様之事ニ相成候而ハ外々江も大ニさし障候」というのが介川の思いであり、「尚も勘弁可仕之段申聞候」として再考を促している（『日記』天保四年十月二日）。

いま一人の蔵元である梶川家も、「御大造之義被仰付候ニ付前後相迫り可仕様無御座、只々恐懼仕候計りニ御座候、（中略）内々混雜之わけも有之、旁何とも奉恐入候へとも幾重ニも御勘弁被成候様仕度奉願候之段只管申聞候」と、消極的な対応であった。このような事態に対して介川は、「肝要之御蔵元兩人とも右之振合心痛之至ニ候」と、嘆息している（『日記』天保四年十月二十九日）。

長田家は九〇〇貫目を承諾している。藩が依頼した一五〇〇貫目には及ばないものの、従来の加嶋屋弥十郎らの協力的姿勢を物語る。通達の額に至らなかった理由について、「千

貫目已上と相成候而ハ 公辺をはしめ外々江之聞ひも如何」ということがあり、また長田家では一家に一〇〇〇貫目という銀高を一度に貸付けたことはほとんど例がないと述べ、春先の調達銀を合わせると一五〇〇貫目に達するとしている。

「如何とも其余ニハ相成不申段老分之物の申候」というあたりに、弥十郎個人の力では動かしがたい経営陣の思惑がはたらいっているといえよう（『日記』天保四年十一月六日）。しかし、同家の史料によれば、その後も借財の追加があったことがわかる。表5は、「秋田凶作違作調達銀元入残高銀高調」という文書に添付された借用証文のすべてを整理したものである。これは、前掲表4と同様天保十四年に再整理されたもので、「天保九年戌年より利足年五朱渡り之株証文廿三通在之、口数ニ相成此度一紙証文ニ改ル」という扱いになっている。つまり、月八朱の利息として借り入れたものでも天保九年に年五朱とされているのである。表からわかるように、天保十四年段階で凶作対応のためだけの借入高の総額が二九四六貫目に及んでおり、しかも返済は約一割程度でしかない。秋田藩の長田家への依存の強さが知られよう。

浜方の館入である室谷家（播磨屋）は、「私儀当春御調達被仰付候節も格別之御用之儀と奉存候（中略）此上銀調達之儀迎も難及力候ニ付恐多奉存候得共此度御調達之義は何卒御赦免被下置候様奉願上候」と、口上書をもって歎願している。

表5 秋田凶作・違作調達銀元入残銀高調

年 代	借入高	元入済高	残 高	利息	備 考
天保4.3	100貫目	28貫600目	71貫400目	年7朱	来午より子迄7ヶ年割、3月中返済
天保4.4	100貫目	28貫600目	71貫400目	年7朱	来午より子迄7ヶ年割、4月中返済
天保4.6	200貫目	28貫500目	171貫500目	年7朱	来午より子迄7ヶ年割、6月中返済
天保4.11	300貫目	60貫目	240貫目		来午より戌迄5ヶ年割、11月中返済
天保4.12	300貫目	60貫目	240貫目		来午より戌迄5ヶ年割、12月中返済
天保4.12	200貫目	40貫目	160貫目		来午より戌迄5ヶ年割、12月中返済
天保5.1	150貫目	21貫400目	128貫600目	年7朱	来未より丑迄7ヶ年割、正月中返済
天保5.2	50貫目	7貫100目	42貫900目	年7朱	来未より丑迄7ヶ年割、正月中返済
天保5.6	100貫目		100貫目	月8朱	来未より亥迄5ヶ年割、6月中返済
天保5.8	100貫目		100貫目		来未より亥迄5ヶ年割、7月中返済
天保5.10	100貫目	20貫目	80貫目	月8朱	来未より亥迄5ヶ年割、9月中返済
天保5.12	100貫目		100貫目		当午より戌迄5ヶ年割、12月中返済
天保6.1	100貫目		100貫目		当未より亥迄5ヶ年割、12月中返済
天保6.1	100貫目		100貫目	月8朱	来申より子迄5ヶ年割、4月中返済
天保6.3	100貫目		100貫目	月8朱	当未より亥迄5ヶ年割、12月中返済
天保7.8	100貫目		100貫目		来酉より丑迄5ヶ年割、7月中返済
天保7.9	100貫目		100貫目	月8朱	来酉より丑迄5ヶ年割、8月中返済
天保7.10	100貫目		100貫目	月8朱	来酉より丑迄5ヶ年割、9月中返済
天保7.11	100貫目		100貫目	月8朱	来酉より丑迄5ヶ年割、10月中返済
天保8.4	100貫目		100貫目	月8朱	来戌より寅迄5ヶ年割、3月中返済
天保8.12	146貫目		146貫目	月8朱	来戌より寅迄5ヶ年割、11月中返済
天保8.12	100貫目		100貫目	月8朱	来戌より寅迄5ヶ年割、11月中返済
天保8.12	100貫目		100貫目	月8朱	来戌より寅迄5ヶ年割、11月中返済
計	2946貫目	294貫200目	2651貫800目		

・長田家文書「秋田凶作違作調達銀元入残銀高調」添付証文より作成。

ただし、それでは館入としての申し訳がたないから米二〇〇石を献納したいと付け加えている(『日記』天保四年十一月三日)。
ただし、介川らは、それでも「尤々様ニハ申上候へとも尚も精々心配仕、少也手繰相成事ニ御座候ハ、追々奉申上度心得ニ御座候」という言質を取ることを忘れていない。

館入のなかでは長田家とともに比較的秋田藩に協力的な姿勢をとり続けた鴻池庄兵衛の場合、次のように述べて負担の減額を訴えている。

御調達の義庄兵衛ニも恐入いろく勘弁取調仕候へとも、元来御承知被成下候通人之ものを当テニ繰合仕候家業ニ御座候得ハ、今年柄人氣騒々敷御座候得ハ何時如何成事出来可仕も難計、右備皆無ニも相成不申、当春御受仕候四百貫目之内当暮・来春之納も残居、是さへ心配仕罷在候所へ此度弘前様・仙台様・秋本様等よりも御用被仰付当惑至極仕、右之上御屋敷様御大造之御用

いかんとも行届不申候、因而ハ当年収三百貫目御請可申上候間、何卒是にて御免被成下候様仕度奉願候（同前）

鴻池庄兵衛は、鴻池善右衛門の分家筋であるが、文化九年（一八一二）より、米切手所持者に米切手を担保として貸し付けする入替両替を行って台頭してきた商人であった。あらためて指摘するまでもないが、大凶作に襲われた東北諸藩がこぞって大坂商人の力に依存しようとする動きがみられるとともに、大坂市中自体が東北・東国の凶作の影響を受け、不穏な状況になりつつあったことが、右の記述から読み取れる。

3 大坂市中米の統制

東北の凶作という状況下で、東北の大名を中心に大坂での買米活動が始められた様子は前掲の史料中でもみられたが、すでに浜方の館入播磨屋権之助は、西国・九州からの登せ米は上作の年でも九〇万石程度のものであり、それを秋田藩だけで一〇万石の買米を計画しているということは、「其外弘前・会津等よりも下し米申来候」という状況を考えれば容易ならざる事態であり、米の津留もありうると指摘している（『日記』天保四年九月二十六日）。十一月に入ると、事態はいつそう深刻な状況となる。次は浜方の館入吉文字屋久米蔵の意見である。

御金出来候ハ、御国をはしめ仙台様・南部様・津軽様ニも夫々御下米可相成、いよ／＼左様相成候時ハ大坂之ものハ飢餓ニ及候外無之筋ニ御座候様申事ニ候、畢竟夫故と見 御城代より町御奉行へ嚴敷被仰渡、米価高直ニ不相成様との為、買メニ而もいたし候様のもの厳ニ御吟味、其上入替と申候而米を買、右之米札を質入ニいたし候事平年之有内に候所、今年ハ必止と御さし留、其上銀主とも調達等いたし候高をも内々御聞合等有之、とかく調達出来不申候得ハ買下しも出来不申筋故と相見、市中大二恐れ候様、弥十郎はしめ申開候、左候得ハ諸国へ買下し御差留ニも不相成ニ付買下候事不相成様いろ／＼手を被入候事と相見候、尤夫等之為か肥後米等壹石百三拾三四匁迄ニ相成候所段々引下百拾四五匁ニ相成候よし、右人替出来不申ニ付正金無之候得ハ買入相成不申、調達ハ殊ニ六ヶ敷、かた／＼当惑之事ニ候

（『日記』天保四年十一月七日）

ここでは、大坂市中の米不足への対応として町奉行を通じて買米の規制、米札の質入の禁止、加えて大名への調達銀高の調査まで行われるであろうと予測している。加嶋屋弥十郎からも、「町御奉行二而ハ成丈米下直ニいたし候様との御仕向二而入替取候事も御吟味ニ而御さし留、少し之石数買入候ものも御吟味、調達等当分ニいたし候ものも御聞合之人候様

二而いよく一統甚恐入、店かたなど二而も大ニ心配仕罷在申候、必々御調達多く御受申上候もの、事等御秘し可然」との助言がよせられている〔日記〕天保四年十一月十日。そして、払米差し止めは現実のものとなる。

当時、介川の記録によれば、秋田藩は、伊予米・広島米・筑前米・備前米など合わせて二万石分の切手米を所持していた（実際にはこの切手も入替の名目で質入されている）。介川らはただちに現物との交換を打診するが、大坂町奉行所の意を受けた年行司が米の払い出しに難色を示した。介川は十一月二十四日、以前より懇意にしていた西町奉行所与力吉田勝右衛門に米払いの状況について直接尋ねている。介川は、米他所払い停止の風聞についてたまたましたのであるが、それについての回答は「米価猥ニ引上候ハ全見込を以多分ニ買入候もの有之故之義ニ付、右を御封し被成候事ニ候、少々ツ、不目立様御買入候事ハ何も御構無之筋ニ候」というものであり、払い入れ後の国元への下米についても「夫を御差留被成候程之事ニ候得ハ前廉御達不申候得ハ不相成事ニ候、御届等被成候而ハ却而不宜、段々御積出被成候而よろしく候」という回答を得ている（天保四年十一月二十四日）。しかし、実際には、同月二十九日、町奉行所より次のような触れが出された。

此節江戸表有米払底ニ而諸人及難義候ニ付 公儀ニ而も

色々御世話も有之候へとも、追々米価高直ニ相成候義ハ武家方ニ寄附米いたし候向も有之哉と相聞、武家・寺社・町方共一同救合候心得ニ而其家之飯米仮成二間ニ合候ハ、余分は勿論違作無之国柄は不貯置早々江戸廻し致し、問屋并脇店米屋共江売捌候様可致候
右之通可被相触候

〔日記〕天保四年十一月二十九日

すなわち江戸における米不足対策として、幕府は余米のある各地域に江戸への廻送を命じたのである。ここには大坂と特定はしていないが、全国の産米が集中する大坂が例外であるはずはない。つまりこの段階ですでに大坂町奉行所は米の統制を視野に入れなければならない立場にあつたし、商人たちも諸大名の買米要請に自由に応えることができる状況にはなかつたといえよう。

介川の交渉に対応した年行司西村屋喜右衛門は、米の払い出しをしないのは町奉行所の指示であること、しかし奉行所も表向きそれを禁止するわけにもいかず、年行司にその統制を無理強いしているのが実態だと答えている〔日記〕天保四年十二月十六日。西村屋は納得しない介川に対して、「実ハ私ともへ他所出し差略之義被仰渡津留と申之筋ニも無之無理成事を以夫々談候事ニ御座候、万一江戸表なとより何と而御沙汰之節ハ無調法を私共へ御かけ被成候之御趣意と相見迷

惑至極仕候」(「日記」天保四年十二月二十二日)と本音を漏らしている。年行司へ米の払い出しを差し止めさせておきながら津留ではないというのは矛盾した論理であり、つまるところ公儀などより沙汰があった場合自分らに責任を取らせるつもりなのだということである。こうなれば、交渉の対象は町奉行所にならざるをえない。十二月二十日、介川は東町奉行宛にかなり長文の嘆願書を提出しているが、その際折衝にあたった与力に対して、口頭で次のように主張している。

此節より一門・家老共以下家中無残三合五勺、町人・百姓式合五勺之面扶持にいたし非常之取調を以只々二月廿日頃迄二も着米相成候所を折角相待罷在候義ニ御座候得ハ、万一遅滞ニ相成候而ハ実ニ数万人之人命ニ相拘不容易事ニ候、国民撫育之義ハ改而申上候迄も無之事ニ候へとも、奉対 公義領主第一之勤ニ御座候所、万々行届不申候而ハ天災無拠とハ乍申、於^御——深く心痛被致只々右着米を折角相待罷在候事ニ候所、万一延着ニ相成莫大之人命ニか、わり候而ハ大事至極之義、於私共前後当惑可申様無之事ニ御座候、切手米之義ハたとへ大坂ニ御座候とも其持主之品ニ而其所之ものニハ無之筋ニ候得ハ、年行司とも難相渡と申之筋何とも不相濟義ニ付、不得已渡方被仰渡被下度申上候事ニ御座候、然ルニ尤ニハ候へとも難被仰渡之趣ニ御座候而ハ誠以恐惑至極之義ニ御座

候、御苦柄等申上候心底曾而無之義ニ御座候へとも不及是非、江戸表へ也願申上候外有之ましくと存申候

(「日記」天保四年十二月二十日)

ここで注目されるのは、「国民撫育之義」こそ公儀に対する大名の第一の務めであるという論理(すなわちそれを妨害する措置を取るやり方は公儀としてあるまじきことであるという論理を含む)が前面に主張されていること、大名が所持する切手米分の米は大坂の所有物ではないということ、ここで埒が明かないのであれば江戸表への訴願も辞さないという姿勢をみせていること、である。ここで展開されている介川の論点には、凶作^ニ米不足という状況下において露呈される幕藩制的市場構造の矛盾そのものが示されているといえよう。

こうした粘り強い介川の交渉によって、当初二万石のうち三〇〇〇石を払米とする条件を出していた奉行所であったが、最終的には、残り一万七〇〇〇石のうち一万五〇〇〇石を四月までに渡すという決定を下している(「日記」天保五年一月二十日)。しかし、実は秋田藩側において、その米切手は入替によって質入れになつており、「右切手受戻ニも当惑之体」「切手米皆受戻候ニハ凡三万両程無之候而ハ不相成」という状態にあったのである(「日記」天保五年一月二十日)。したがって介川は、町奉行と米の払い出しの交渉を

する一方で、その受け戻しについても対策を講じなければならなかったのであり、その意味でも新規調達はずびとも実現しなければならなかったのである。

4 銀調達と買米の努力

再度調達銀の問題にもどうう。介川の要請に基づいて国元から家老小野岡大和が着坂したのは、天保五年二月二十二日である。翌二十三日には館入ら一同と対面、二十九日から三日間、館入らへの賞与の儀式を行っている。小野岡の登坂は、単に今回の調達にたいする札にとどまらず、調達銀増額の思惑をもつてのことであることは、館入らにしても容易に推察できたことであろう。介川の日記によると、三家への正式な「被仰渡」は七日となっており、その間、大坂詰役人と小野岡との間で、国もとの意向と大坂の現実とのすり合わせを目的とした会議が相当数もたれている。とりわけ注目されるのは、非公式に加嶋屋定八・弥十郎を招いて行われた会談で、「此度之御頼惣高七千五百貫目無之候而ハ不相成之段申候」(「日記」天保五年三月四日)とある点である。つまり、小野岡の登坂を機会に新たに七五〇〇貫目の新調達を目論んでいたことがわかる。これにはさすがの弥十郎らも哑然とするしかなかったようで、仙台藩が八万両という大造の額を發したのに対し応える者がなく、まったくの失敗に帰して笑い種

になったことを例に出して牽制している(同前)。結局、三家をも含め、館入らへの申し渡しには具体的な額を明記せず、いつその協力を求めるかはなかった。ただし、水面下ではその後も介川らによる個別の折衝が行われていたことはこれまでと同様である。また、この時の協力依頼が藩主の「御直書」という形式で出されたことは注目しておく必要がある。藩主の「御直書」という權威を用いているところに、秋田藩の必死の様子が窺われ、またその成果如何では藩の權威が損なわれることを意味しているからである。それだけに、もはや藩には他に手立てがない瀬戸際に立たされていたことがわかる。

介川の日記には、調達銀の一覧がないので、個別に「御請」とある記載を拾っていくしかないが、管見の限りで銀高が判明するものを月別にあげてみると次のようである。

天保四年十月「辰巳屋久左衛門(二二〇〇貫目)、同年十一月「鴻池庄兵衛(三〇〇貫目)、長田作兵衛(九〇〇貫目)、千草屋忠三郎(二〇〇貫目)、升屋源左衛門(三〇貫目)、同年十二月「加嶋屋三郎兵衛(三〇貫目)、鍵屋五兵衛(二〇貫目)、天保五年三月「播磨屋九郎兵衛(一〇〇貫目)、同年四月「梶川孫左衛門(八五〇貫目)、山中新十郎(一〇〇貫目)、辰巳屋久左衛門(五〇〇貫目)、鴻池庄兵衛(三〇〇貫目)、千草屋忠三郎(二〇〇貫目)、難波屋伊助(二〇貫目)、

室谷仁兵衛（二〇〇貫目）、久々知屋吉兵衛（六〇貫目）、酢屋宗十郎（三〇貫目）、升屋源左衛門（一〇貫目）、同年五月
 〓 鴻池庄兵衛（五〇貫目）、大坂屋卯八（三〇貫目）、以上である。

五月末日の段階で大坂での調達総額が五一三四貫目、江戸調達分が九六五貫目、秋田表調達分が一二〇〇貫目となっているから、若干の相違はあるものの、右のデータは大凡を把握できていると考えてよい。これによると小野岡登坂後の「御請」高がおよそ半分に達しており、なんとか藩の面目は保たれたといえよう。しかし、辰巳屋や長田がいち早く多額な銀高を了承しているのに対し、蔵元の梶川は請書の提出が遅く、山中に至っては、店方の内証を反映してか請高は低いものとなっている。その一方で、辰巳屋や加嶋屋庄兵衛のように、請高を追加している者もある。

以上のような介川ら大坂詰役の努力により、天保五年の三月に入ると「秋田より先便申越候、御廻米式艘之外当月三日より十一日迄追々拾式三艘達候趣、其外加州米も、越後出も四五艘着之よし、（中略）右二付よふく／＼人氣蘇生之おもひをなし一同雀躍いたし候よし」（「日記」天保五年三月二十九日）というような朗報も大坂蔵屋敷に届くようになり、五月になると介川らにも「もはや御調達之義も大抵かた付候様之もの」（「日記」天保五年五月七日）という認識が生まれるに

至っている。

ここで本節の最後として、秋田に廻送された米の出所を確認しておきたい。この時期仙北筋の郡奉行であった湊曾兵衛の記録によると、大坂・加賀・富山・越後・飛鳥（酒田）などからの廻送のあったことがわかる。これらについて介川の日記をとおして確認していくと、まず、加州米については辰巳屋をとおして折衝をはかり（天保四年九月二十六日）、町人米五〇〇〇石の買米を実現している。富山米は、大坂に登る途中に清水衛門が当地に立ち寄り交渉を開始し、一〇〇〇石を確約している（天保四年十月十七日）、越後には国元から藩役人が派遣されて、天保五年一月までに一万七〇〇〇石の買入れを実現している（天保五年一月二十三日）。このほか、久々知屋をとおして、摂津国に知行地を持つ青木氏（甲斐守）と交渉（天保四年十一月十一日）、筑後の諸大名や薩摩藩との交渉（天保四年十二月六日）、土佐米・阿波米の調査（天保四年十二月）、兵庫における肥前米三〇〇〇石の買付け（天保五年一月二十四日）など、湊の記録を越えて実に多方面におよんでいることがわかる。これらの中には買付けが実現しなかったものもあるだろうが、買付けに至った米はおそらく大坂米に含まれているものと思われる。留意すべきことは、多くの場合その交渉・仲介は館入らが務めていることである。

第四節 館入との日常の交流

最後に、館入たちとの日常における交流のあり方をみておきたい。国産品や蔵米取引による利害関係が両者の基本であるとしても、調達などの交渉が藩役人の思惑どりに進められるためには、両者の関係を維持するための日常的な努力があったと考えられる。それは、廻米や蔵物を獲得して商品化しようとする館入の側にあっても同様である。両者が日常的にどのような交流の機会をもっていたのか、介川の日記をもとに確認しておきたい。

まず、日常的なものとしては、毎月一日と十五日を「当日之礼」の日とし、館入らが屋敷に挨拶に訪れている。「当日之礼、旧家・新家御館入来、塩屋惣十郎碁を打夜二及」などであり、単なる儀礼にとどまらず親睦を深める機会でもあったようである。このほか、六日を碁会の日として設定していたようで、これは「拙者御長屋ニ而碁会いたし、御館入招候、昼より山中新十郎・清八・幸八参候、夕後よりかしまや弥十郎・要助・鴻池庄兵衛・辰巳や佐助・長兵衛・山崎屋与七郎等追々参候、夜五ツ半頃二及、御屋敷人数皆出ル」（天保五年十月六日）というように、主な館入が介川の借屋敷に招かれて行われたもので、昼から夜五ツ半頃までとあるから、長時間にわたって行われている。また「御屋敷人数皆出ル」と

あるように、介川だけでなく蔵屋敷詰の役人らも参加して親睦が図られていることがわかる。

大きな規模で行われたのは、廻銅船や廻米船の無事廻着の祝いと次年度の安全の祈願である。これは、それほど日を隔てないが別々に行われるのが恒例であった。どちらも住吉社への参拝が形式上の目的である。天保三年を事例として安全祈願の方からみてみよう。この集まりを「萬度会」と称している。まず、「住吉ニ而萬度会舟々無事着之祈例之通御蔵本両家并かしまやにていたし、御やしき人数無残因招参候」とある。三家が主催で、屋敷詰の役人はみな出席していることがわかる。朝八時頃より出発して、住吉社近くの伊丹屋という料亭で休憩、ここで三家の当主あるいは支配人と集合している。ここで軽く酒と飯を食し、それより袴に着替えて住吉社へ出発する。この日は雨のため中止となったが通例では境内で神楽を奉納するのが慣例であった。社のなかで細々とした拝殿の儀式を済ませ、また伊丹屋へ戻って着替え酒席となる。午後四時頃岐路に着き、さらに途中富田屋という茶屋に入って酒宴となっている。帰宅は「夜九ツ頃帰」とあるから、真夜中である（以上「日記」天保三年二月十七日）。

次に着船祝いをみてみよう。段取りは祈願の時と同じであるが、仲仕なども参加させているため「上下百八拾人」と大人数である。やはり住吉社近くの伊丹屋に集合、その後住吉

社へ参拝している。「庭神楽等惣而萬度会之節之通」とある。参拝が終わつてふたたび伊丹屋へ戻り酒宴となる。人数が多いため座敷は貸切である。午後四時頃引き揚げ、そのまま住吉屋という茶屋に席を移し、また酒宴となつてゐる。「芸子十七人参候（中略）いづれも飲を極めけいこなどをどふにあけ大さわき也」などの記述から、その様子の一端が知られよう。この日参加した館入（支配人を含む）は二十四名におよんでいる（『日記』天保三年三月十一日）。以上のほかにも、節句や屋敷内の稲荷社の神事、蔵開や蔵仕舞等、館入を招いての酒席は少なくない。

館入からの招きによる酒席も少なくない。介川の着坂の直後、その歓迎ため三家による主催で道頓堀に芝居見物に招かれた際には、芝居小屋で二の膳、三の膳付きで酒を飲み、芝居が跳ねた後も「富田屋へ移品々馳走有」と記している（『日記』天保三年十月二日）。

個人的な対応も多い。いくつか例をあげてみると、「辰巳屋久左衛門出会「持合二而」にて嶋之内富田屋へ参候」（『日記』天保三年十一月二十二日）。「」は割注、「かしまや三郎兵衛出会二而北新地芝居へ参候」（『日記』天保三年閏十一月二日）、「室谷仁兵衛酒振廻申度よし二付御やしき人数不残住吉屋へ参候」（同閏十一月十二日）、「鴻池庄兵衛七ツ半頃参候而、治兵衛・吟味役へも申候二付只今よりすみよしやへ

参候様いたし度との事、いろ／＼調事も候へとも拙者跡より可参と申候而、暮過参候」（『日記』天保四年七月二十六日）、など、その例には事欠かない。とりわけ懇意であつた長田作兵衛のもてなしは介川には驚きであつたらしく、その様子を次のように、事細かに書き記している。

席二八九尺一盃のかけもの大洋二旭の一軸、其余おり廻し見事二そめ候幕又ハ金屏、床の下よりおり廻し座ふとん敷有之、いづれも夫へ座ス、座間へ毛せんを敷有之燭も多し、くわし台へ堆く盛出ス、地車のかた白紅大らくかん、其外もり添有、中居之半えり白りんす、地車のもんを織たるもの也、酒・吸もの出ル、右之吸もの并肴等ハ皆伊勢道中之名物といふ趣向と見、一々五雲之短冊紙之札江其地名を印し有、時にげいこ三人出座間之毛せん之上二座す、左右は三味せん中ハ胡弓也

（『日記』天保三年閏十一月十四日）

もちろん、藩側の馳走も必要である。すでにみてきたように館入らとの相談時にはかならずそのあとは酒席が用意されていたし、そうした場で館入らから貴重な助言を得ることも一度や二度でなかった。たとえば、「御借財仕法」継続の件が問題になつてゐた時点では、「暮以前よりかしまや定八・弥十郎、拙者かたへ招き、治兵衛并又右衛門・甚五兵衛も参候、仕法引継之事二付秋田往復之次第内々申談、（中略）品々

深切之内話有之酒出ス、深更ニいたる」〔日記〕天保四年五月十三日、「鴻池清八相招候所七ツ頃より参候、治兵衛并又右衛門・甚五兵衛も参候、仕法引継之事内談いたし候、(中略)酒出ス」(同十四日)、「暮以前より塩屋平蔵招候処参候、四人揃候而仕法之義清八江申候通及内談ニ、恐入追々願申上候義可有御座と申事二候へとも押々頓置候、すみよしやへ伴候」(同十七日)といった具合である。

目的が達成されれば、当然手厚い馳走が必要である。天保三年の「違作」対応のための調達銀のことが一段落した後には、延べ四日間にあつて「出精御賞」として藩主からの下賜品を与える式が行われ、会の後いずれも茶屋において酒席が設けられている。その人数は、店方との仲介役を務めた支配人らを含めて、総勢四十七人におよぶ。天保四年の飢饉のための調達の際も、家老同席のうえ、「御蔵元始先達御調達御請申上候御挨拶今日於住吉屋御料理被下候」〔日記〕天保五年七月九日)として、二十三名を招いている(出席者十六名)。

介川は、天保三年十月から天保六年三月まで、足掛け四年の在坂となった。例外的な長期の出張である。最後に、介川が国もとに帰国する際の様子を引用しておく。

愈今日出足ニ付八ツ半時頃御やしきへ参候、見送ニ参候面々、和田猪之助・山下八郎右衛門・高岡吉右衛門・大

坂や久左衛門・長浜や源左衛門・助松や伊兵衛・伊勢屋東四郎・かしまや三郎兵衛・鴻池庄兵衛・辰巳や佐助・長兵衛・近江や儀作・かしまや彦七・久々知や吉兵衛・山下休兵衛・百足や太右衛門・北国や平右衛門・山下茂兵衛・かしまや小七・清七・山崎や一郎兵衛其外雜賀や七之助・雜賀や庄三郎も参候、(中略)桜官辺へ船にて送ニ参候もの、山中新十郎・梶川市之助・鴻池清八・塩屋茂助・かしまや弥十郎・山崎や与七郎・雜賀や七之助・久々知や吉兵衛・鴻池太蔵、此外鴻池庄兵衛も参候、治兵衛・又右衛門も罷越候、暫別酒を斟夜五ツ半頃別ル(割注略)右人数の外長田作兵衛も参るべき所不快のよしにて昨日旅宿へ罷越断候也、其余鴻池幸八・塩屋平蔵・かしまや要助等ハ流行の風疹ニ付不参、惣てにきくしく出立いたし候 (天保六年三月六日)

このような場面が、儀礼的なものとして行われていた部分も確かにあろう。しかしまた、一面では無理難題ともいえる調達を忍耐強く説得し、常々の情報交換と親密な関係を維持しようとする大坂詰役人の努力が反映されている側面も否定できないであろう。

結びにかえて

以上、天保四年の飢饉前後における、大坂留守居役と館入

との交渉の実態を検討した。その結果、館入とは、単なる金銭的なスポンサーにとどまらない藩財政のアドバイザー的な役割をはたすこと、一つの調達の実現の前提として緻密な根回しと交渉があること、秋田藩では、文政十二年に借財の返済に関する特別仕法（元銀据置、利率下げ）が実施されるが、天保四年をさかいにそれが恒常的になっていくこと、館入の中でもとりわけ長田作兵衛家（加嶋屋）が秋田藩と密接な関係を保っていること、などを指摘した。

最後に、以降の展開を展望して問題提起としたい。

天保四年の新規調達にある程度成功したとはいえ、いうまでもなくこれらは莫大な借財として以降の藩財政を圧迫することになる。介川の総括によれば、天保三年と四年の大坂調達分が一七万六〇〇〇両、従来の借財（大坂）が二六万両、江戸における調達分が当該時期八万九〇〇〇両、従来と合わせて二二万七〇〇〇、両表合わせておよそ六五万三〇〇〇両となっている（『日記』天保五年八月八日）。この莫大な負債は、やがて藩政の方向を大きく左右することになる。天保九年、藩はこれらの負債の一部返還を企て、再度「家口米仕法」を実施する。これは、士民合わせて領民の飯米をその家の人数に応じて支給米とし、そのほかの米を藩のもとに一元集約させるといふものである。これは、天保四年に飢饉対策として実施されたが、城下は別として全領規模の政策としては

実質的に失敗したものであった。天保九年時には、その目的をはっきりと大坂借財の返済のためと宣言して実施している。²⁵ また、天保十一年（一八四〇）には、上方館入の惣代として久々知屋吉兵衛が来秋し、秋田藩領内における金札の発行や、米の買集を画策している。²⁶ 借財返済への対応が限界点に達した状況の中で、館入らの藩財政への関与が強まってきたことが読み取れよう。全国的視野に立った市場論では、廻米の大坂以外での払い出しの事実をもつて藩の自立傾向を説く論もある。²⁷ たしかに介川にも「追々は太坂御回米被相減地払被成又は松前表交易之義等取計候得者莫大御国益二相成候ハ必然之事候」（『日記』文化八年二月十四日）という認識がみられる。しかし本稿で検討してきた経過をみる限り、全体としてはむしろ大坂への経済的依存度を強めていかにざるをえなかったという事実が読み取れる。こうした動きは、幕末藩政のなかでどのような役割をはたすことになるのか、より巨視的な視点で検討される必要がある。

（注）

- （1）その代表的なものとして、宮本又次編『大坂の研究・第四巻―蔵屋敷の研究・鴻池家の研究―』（清文堂、一九七〇年）をあげておきたい。

- （2）主なものとして、賀川隆行『近世大名金融史の研究』（吉

川弘文館、一九九六年）、藤村聡『近世中央市場の解体』（清文堂、二〇〇〇年）、中川すがね『大坂両替商の金融と社会』（清文堂、二〇〇三年）、高槻泰郎『近世米市場の形成と展開』（名古屋大学出版会、二〇一二年）などがある。

(3) 賀川前掲書第七章、および藤村前掲書第二部第三章。

(4) 賀川前掲書第九章。

(5) 中川前掲書第七章。

(6) 藤村前掲書第三部第二章。

(7) 藤村前掲書第三部第三章。

(8) 伊藤昭弘『一八世紀の藩財政と大坂金融資本』（日本史研究）五〇六、二〇〇四年。

(9) 荒武賢一朗『在坂役人の活動と蔵屋敷問題』（荒武賢一朗・渡辺尚志編『近世後期大名家の領政機構』、岩田書院、二〇一一年）。

(10) 泉正人『藩世界と大坂』（岡山藩研究会編『藩世界と近世社会』、岩田書院、二〇一〇年）。

(11) 高橋秀夫『大坂商業資本と大名貸』（今村教授退官記念会編『秋田地方史の研究』、金沢文庫、一九七三年）、高橋秀夫『文政期秋田藩の大坂借財についての一史料』（『秋大史学』第二八号、一九八二年）。藤村前掲書第二部第二章および第三部第五章。

(12) この時期の国元の飢饉対策については、金森正也『藩政改革と地域社会』（清文堂、二〇一一年）第八章を参照され

たい。

(13) 同史料は個人所蔵のものであるが、以前より秋田県立秋田図書館にその撮影フィルムが所蔵されており、のち秋田県公文書館に移管された。それが個人撮影であること、一九六三年に刊行された『秋田県史・資料近世編』に抄録されていること、一部これを用いた個別論文が発表されていることなどから、同フィルムが、史料所蔵者の利用許可を得て製作されたものであることは容易に推測できたが、秋田県立秋田図書館に所蔵されるにいたる経緯が明らかでなく、また時間の経過から所蔵者が代替わりされている可能性などを考え、一般公開が控えられてきたものである。しかし、二〇一一年、秋田県公文書館の努力によって現所蔵者が明らかとなり、あらためて研究上の利用許可が得られた。史料原本は所蔵者のご都合により見ることはできないが、現在は撮影フィルムがプリントされ、写真本として、秋田県公文書館で閲覧・複写が可能となっている。本稿は、この写真本を利用している。

(14) 『改革派官僚』ということ概念については、金森前掲書第五章・六章を参照のこと。

(15) 『大阪の研究』第四巻、一〇九頁。

(16) 『新修大坂市史』第三巻、四八三頁。

(17) 同右。七三七頁。

(18) 『日記』にはこのときの調達銀を一覧できる記載がない。

これは「日記」に請書提出とある部分を随時書き出したものである。

(19) 前掲『新修大坂市史』第四卷。中井信彦「転換期幕藩制の研究」(塙書房、一九七一年)。

(20) 「摂津国大坂玉水町加嶋屋長田家文書」。国文学研究資料館所蔵。以下、同家の史料については「長田家」と注記する。

(21) 長田家「秋田口々調達銀元入残銀高調」。

(22) 『新修大坂市史』第四卷。

(23) 同右。

(24) 金森前掲書第八章。

(25) 同右。

(26) 同右。

(27) 前掲の藤村聡「近世中央市場の解体」がその代表的なものである。藤村氏は秋田藩を検討対象にした部分で高橋秀夫氏の論文(高橋——一九八二)に拠りながら、介川が、地払いの方が大坂廻米より高い利潤をあげうることを試算していることを指摘して、藩の「大坂離れ」を示すものとしているが、この事実のみをもって秋田藩の上方経済からの自立傾向ということにはならないと考える。